
カブトムシ

あめこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カブトムシ

【Nコード】

N5830B

【作者名】

あめこ

【あらすじ】

カブトムシを巡る、ちょっと切ない話。

朝早く起きて、カーテンを開ける。ついでに窓も開ける。真夏の太陽はもう顔をのぞかせていて、朝露に光を浴びせかけていた。夏独特の、しかも朝限定のすがすがしさを、体一杯に感じる。

ふと、目の前の白樺の木に注目してみると、幹に、少し小ぶりのカブトムシが一匹。

私は、何の躊躇いもなく裸足のまま窓から外に出ると、白樺の木からカブトムシをむしりとった。

そいつは朝露にまみれていたので妙にみずみずしかった。それに、朝露が太陽の光に反射して黄金に輝いていた。

黄金の、カブトムシ。

何だか特別な気がした。

私は嬉しくなって、急いでそいつを金魚用の空の水槽につっこんだ。白樺の枯れ枝と、土を少し入れて。

それが、数年前の夏休みのできごと。

それから私は毎日、カブトムシの観察をした。今日はスイカを食べていた。今日はメロンを食べていた。今日はきゅうりを食べていた。今日は、今日は……。とにかく、食べてばかりなカブトムシの世話をし、観察日記をつけ、手のひらに乗せて遊ぶ。これが私の日課となっていた。私は本当は昆虫が嫌いなのだけれど、カブトムシの世話はなぜ楽しかった。

けれど夏休みも半ばを過ぎる頃、私は急にカブトムシへの興味を無くしてしまった。飽きたのだ。ためていた宿題に手をつけ始め、忙しくなったせいもあるだろう。でも、一番の原因は、カブトムシがあまり活発に動かないということだった。食べているばかりで、ちっとも面白くなかった。犬や猫のようにじゃれてくるわけでもなく、ただ、じつ、としているだけだったのだ。酷い話だが、子供というのはとても飽きっぽい。

私はそれっきり、カブトムシの世話をやめてしまった。

久しぶりにカブトムシを見たのは、夏休みが終わる三日前のこと。「カブトムシ、死にかけてるわよ。いいの？お母さん、知らないからね」

という母の一言を聞いて、不安になったからだった。

水槽をのぞくと、そこには、母のあげたらしいきゆうりの上に無
気力そうに乗っているカブトムシの姿があった。

今にも死にそう。

黄金に輝いていた甲羅は、履き古した革靴のようになびいて、
すごく情けなく思えた。まるで中年のサラリーマンのよう。

あんなに強そうだったのに。今ではそれをちらりと感じ取ること
ができない。

急に嫌悪感がおそってくる。

私は、カブトムシに後ろめたい思いを抱えつつ、そこから逃げて
しまった。

自分で拾ったくせに。

でも、弱そうなカブトムシを見た瞬間、「憧れ」とのギャップを
感じ取ったと同時に、気付いてしまったのだ。カブトムシが「昆虫」
の一つであることに。

「汚い」、と、思った。

カブトムシが死んだのは、それから三日後。夏休み最後の日。

甲羅を地面につけて…要するにひっくり返って死んでいた。

今さらだけど、私はその日はずっと泣いていた。自分がさじを投げたばかりに、何の罪もないカブトムシを死なせてしまった、と……最悪だ。

もっと曰当たりや、風当たりのいい場所にいさせてあげるべきだった、とか。せめて秋までは世話をして、林檎とか梨とか葡萄とか、美味しいものを食べさせてあげたかったと思った。

なんてわがままなんだろう。飼い始めたのは私なのに、最初のうちだけ世話をして、あとはお母さんに押しつけて、とうとう殺してしまったのだから。

現実と、夢や憧れは全く違うものだと思い知った。

「カブトムシ」という犠牲を払って。

カブトムシを世話して分かったのは、たったこれだけのことだっ

た。

これだけのために…殺してしまった。

私はまた泣き始めた。

……………それにしても、あつけない。

私はようやく泣き終え、考える。

命って、大事だ大事だと言っけれど、こんなにもあつけなく閉じてしまうものなのだろうか。だとしたら、何のために生まれてくるのだろう。

あのカブトムシだって、土の中にたくさんいて、やっと地上に出られたと思ったら、私に捕まってしまい、生を強制終了させられることになるとは微塵も考えていなかったはずだ。

何のために生まれて、何のために死んでゆくのだろうか。

子孫を増やすために生まれる？ だったら死ぬ必要はないじゃないか。増えすぎるから死ぬ？ だったら生まれなければいいじゃないか。……………ああ、そうしたら何も無くなってしまう。

じゃあ一体どうすれば。

私は一体何をしよう。

堂々巡りを始めた考えの渦の中、私はベッドに体を横たえ、無気力そうに眠りに落ちていった。頭の隅で、これではまるであのカブトムシだ、と思いながら。

数年前の夏休みの話。

（後書き）

季節外れですみません…（現在二月）。

これは一度発表したことがあるものです。

今回、改良を加えて掲載させて頂きました。

文法や描写等、拙い部分は多々ありますが…

ご指摘頂ければ嬉しいです。

ここまで読んで下さりありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5830b/>

カブトムシ

2010年10月11日01時05分発行